sumi tsugu

すみつぐ

継いでいきたい眺めが

MEGAWA
FEBRUARY 2020

©2020 City of Ritto All Rights Reserved.
ritto-akiyabank.jp

歴史街道と立場のまち、目川地区

栗東市目川地区（および岡地区）は、江戸の五街道の一つ「東海道」が通り、草津宿と石部宿の間（あい）の宿、目川立場（休憩所）として賑わったとされています。

目川田楽や目川ひょうたんなど歴史文化が漂い、往時を偲ぶことができます。

東海道への憧れを超えて

旧東海道の街道筋である目川には、週末になると「東海道ウォーク」を楽しむ人たちが往来する。往時は目川立場で田楽に舌鼓を打ちながら疲れを癒す旅人たちで賑わったことだろう。

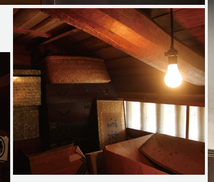
目川で街道に面した家々の家系は古くからこの地で続いてきたものが少なくない。そうした家が所有していた田が開発され新しい住民が増え、自治会としては栗東市一の人口になった。しかし今でも涼み湯、左義長、小槻大社の祭礼といった伝統行事が多く残っている。街道筋で続く旧家を訪ねるなると、歴史を重んじ、伝統行事に率先してかかわる人をイメージする。だが、山本一博さんに出会うと、それが私たちが半ばノスタルジーも持って地域に押し付けてきた印象でしかないのかもしれないと思わされる。

山本一博さんは、64歳。生まれも育ちも目川の同じ家だ。5年ほど前に体調を崩してからは、自治会の班長なども免除されているが、それ以前から積極的に会合にでてきたわけではなかった。地元の神社や寺にもずっと行っていない。

街道筋に事務所を置きたいという人の話を聞くと、東海道をブランドみたいに思い込んでいるのではないかと手厳しい。田舎や街道への憧れと、実際に住むのとでは違うという。事実、家の前の旧東海道は抜け道として交通量が多く、曲がりくねっているので安全とはいえない。昔は3路線あったバスも今では1路線、1時間に1本だ。バス停やごみ置き場に行くにも車が多くて道を渡れない。

家を「住み継ぐ」ことをテーマにしている私たちの来訪を一博さんはどう捉えたのだろうか。「たとえば、この家をなんとか保存したいとか言われてもね。昭和のね建物を保存してね、何の値打ちがあるんやと。「何でもかんでも残しといたらええのかっていうと、ちゃう。1000年残すだけの価値があるか」と、どこか否定的にも見える。いずれ一博さんが亡くなると、相続する相手は妹だけだが、既に妹は家族をもち家もある。すると、自分の代のうちに取り壊し、売却した方がいいのではないかとも考える。

しかし一博さんは悲観的な人ではないし、まして効率を追求する人ではない。伝統、歴史、地域、家屋に対するアンビバレント（両義的）にもみえるものの見方がはどういった人生観に基づくものか、話を聞くうちにわかってくる。



曳家で働かした（蔵）

地域では馬や牛を飼うことがありました。山本家でも馬小屋を建てていましたが途中で大工が突然くなられた。「一博さんの代になってから、この家全体を曳家で裏の畑近くまで下げられたそうです。

父との思い出（碁盤と碁石）

碁を打つ相手がいなかった父は、高校生の一博さんに碁の打ち方を教えてくれました。

碁石は日向はまぐりと那智黒石。碁盤は父が譲り受けた本榧もの。

今は目川の地域交流拠点（たつて館）に貸し出しています。

大小で用途が異なる（提灯）

大きなものは祭礼提灯、氏子・小槻大社の祭神である用の文字と前社の神紋「下り藤」が描かれています。

小さなものは各家庭で提灯箱に入れて複数所持する。家紋入りの提灯です。客の送迎などに活躍したでしょう。

地域との関わり

一博さんは目川のこの家で生まれ、市立の保育園・小学校・中学校に通った。高校は京都だったが実家から通い、大学で愛知に越した。

実家が関わっていた会社は、一博さんが高校生のころに工場火災を受け、区画整理のために工場再建が困難であったため、大衆食堂の運営に事業を転換していた。しかし、一博さんが大学に通ってすぐ、父親の体調が悪くなり入院を余儀なくされたことを受け、一博さんが事務仕事を一手に引き受けることになる。こうして大学は中途退学し、会社の仕事に従事するようになった。

子どものころは学校でメンコやビー玉、ドッヂボールで遊んだ記憶がある。高校・大学と市外に通っている間に、地域での交流拠点

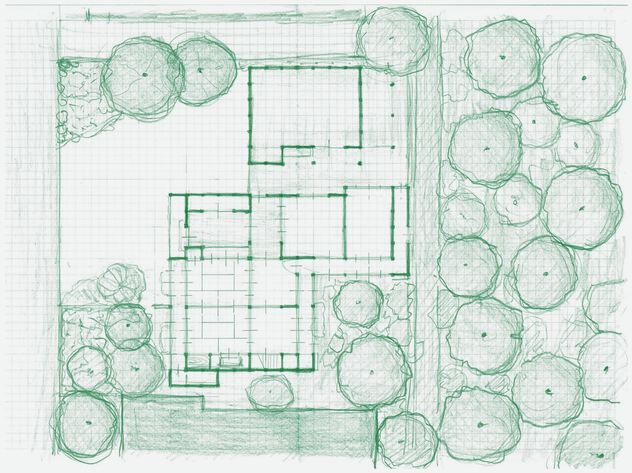
その父は海軍飛行予科練習員（予科練）として航空隊（教育訓練部隊）に配属された。配属先を見る限り終戦を前に特攻要員として転属したと思われるが、父は戦地に赴くことなく終戦を迎えた。家には隊の同期会名簿が残り、しばらくは同窓会も開かれていたという。また、今回の聞き取りの過程で入営の幟旗が見つかった。「こんなものが家にあるとは思わなかった」と一博さんも驚きを隠さない。

一博さんは高校生のころから、信市さんが好きだった碁を一緒に打ち始めた。家族で外にでかけるとき、信市さんはいつも一博さんを助手席に乗せた。父親心に息子がいい景色を見せてやりたかったのだろうか と感じながら耳を傾けていた。

同年代の付き合いは途切れてしまった。とはいえ、隣近所の人たちとは今も伊勢講（新年会）を楽しんでいる。また、ここ五年ほどは西国三十三所をはじめとする寺社巡りも友人とともに楽しんでいる。庭園も好きだし、場所がかわると素直な気持ちが生まれてくるのが寺社巡りの楽しみだ。

父の思い出

一博さん自身は健康の事情もあり、地域での活動にそれほど取り組めるわけではないが、父・信市さんは地域と深く関わる人生を歩んだようだ。自治会長も務めたし、近所の寺では檀家総代も務めていた。しかも、そうした役割を50代で引き受けていたという。山本繁信町長（当時）の町政を陰で支えてもいた。



東海道に車が通らなかったら
－東海道ほっこりまつり－

普段は通過交通が多く、安心して
歩くことができなくなった
東海道。
歴史や文化に想いを馳せ、
地域住民にとって愛着があふれる
東海道。
「東海道をほっこりしながら、ゆっくりと歩いてみたい」
そんな想いから始まった
東海道ほっこりまつりが開催されています。

交通の要衝といわれる「栗東」は
街道と歴史文化とともに
歩んできたまちといえるでしょう。

物置に残る時代の刻印

父の信市さんは大正13年（1924 年）生まれ。この家が建ったのは、その4年後の昭和3年（1928年）だったと聞いている。そして信市さんが亡くなられたのは64歳の昭和63年（1988年）、一博さんが33 歳のときだ。つまり、信市さんは4歳からの60年間、一生のほとんどをこの家で過ごされた。

信市さんも、この家を建てた祖父・半四良さんも、人からいただいたものなどを記帳していた。一博さんが「一度も開けたことがない」という仏壇横の収納からは、半四良さんや信市さんが残した種々の掛け軸や、信市さんの入営幟旗とともに、数多くの帳面もでてきた。

帳面の中には「上棟式祝受帳」（昭和3年3月19日）もある。一博さんの記憶通りの昭和3年、この家の棟上げに際していただいた祝いの金品が記録されている。白米・玄米・もち米・赤飯、酒、こんにゃく、縄、手ぬぐい、現金と多様なお祝いが実に47か所からも届いている。

その15年後には「納屋上棟式祝受帳」（昭和18年10月6日）が記された。このときももち米や現金のほか、釘などが届いている。

釘や縄が棟上げのお祝いで届けられるというのも勉強になるが、それにしてもマメな記録だ。当時は親族でなくても付き合いのある地域の人たちと贈り物のやり取りが多く、丁寧に記帳しておく必要があったのだろう。ほかにも病気のお見舞いでリンゴ、砂糖、サイダー、飴、さらに「どりこの」（栄養ドリンクの一種）などをもらったことがわかる。この家と、ここで暮らした人たちの時代が刻印されて眠っている。

仏壇横の収納のほか、客間の提灯箱、土間横の物置、以前は人が住んでいたが収納と化した二階などには、手つかずのものが置かれている。整理とか断捨離といった流行とはほど遠い。私たちはぶしつけにも提灯箱を開け、物置のものを全部出してみた。

提灯箱にも物置の農具や餅の干し板には、どれも祖父か曾祖父を示す「山半」の焼き印がある。

私たちが驚いたことに、中を確認したことがないという一博さんが、ほとんどの物について解説してくれたことだ。決して家の歴史や暮らしに無関心なわけではないし、父から聞いたことはしっかり記憶に留められていることに、父との思い出の大切さを感じた。

「使ってくれるのが、一番ええ。」

二階には碁盤と碁石が置いてあった。碁盤にかけられた布には埃が積もっていたが、碁盤は長く使い込まれて飴色だ。今は亡き父と、決まった時間も場所もなく、よく碁を打ちながら話した。碁盤と碁石、大事なものだとはわかりつつも、近くの交流拠点で活用させてもらえないかうかがったところ、快諾された。「使えるものがあるんだったら、誰かが使ってくれるのが一番ええ。」

碁盤と碁石は、手で渡せるし、すぐ返してもらうこともできる。だが、家や土地はそう簡単にはいかず、早いうちから考えなくてはいけない。

一博さんの家系は短命で、長い人でも60歳を超えた頃に亡くなったという。もう自分はその年齢を超え、いつ死んでもおかしくないとどこか感じている。終活とまではいわなくても、それに近い感覚でいる。「うちの場合は、おそらくやけど、潰さざるを得ない。」

何でも残しておけばいいというものでもない。元気なうちに不動産を現金化して相続できるようにしておくのも自分の務めではないか。

でも、家を潰さなければならないのは寂しい。それに、家だって使ってくれるのが一番いいのではないだろうか。

無駄をもつ余裕

実は今の家は、一博さんが一人暮らしするには広すぎる。直したいとも思う。生活上の効率を考えるなら、直した方がいい。

しかし、効率で家屋を考えると、こういった間取りの家は建てられなくなる。実際、この数十年に建てられた家は効率が重視されてきたのではないか。一博さんは、そう考える。「よそから来たら、とりあえず住む建物があったらええ。こういう家は、どんどん潰されていくわけでしょ。

変な話、効率化ばっかり求めているけど、効率化いうのは良くいえば無駄をなくすこと。

でも、私はそもそも無駄やと思ってないですよ。無駄じゃなくてそれ余裕やと思ってるんですよ。」

一人暮らしには無駄だといって家を直してしまっては、効率を求めて無駄を排することになってしまう。それは気に入らない。自分の心には余裕を持っていたい。それが一博さんの願いだ。「草が生えたらね、農薬を撒くんじゃなくて一本一本手で引く。無駄な話ですわ、時間的にもね。でもその方が人間の精神的な安定感においては上、違うかな。」

一博さんのアンビバレントな感性が、私たちにもようやくわかってきた。

効率はもちろん大事で、無駄をなくすことを考えるし、現実的にそうせざるを得ない局面も多い。しかし、そこで一博さんは一回立ち止まって考えてみる。もう少し強い言葉でいえば、無駄だと感じる自分の効率性を疑うのだ。

「無駄なもの」を排除するのではなく、「無駄だと考えてしまう自分の効率性」を除くことで、精神的な安定感＝余裕をもつことができる。

街道筋の田舎の生活は、一博さんにとって、効率性と余裕の狭間で常に悩み続ける舞台なのだ。だからこそ、ただ表面的にそうした属性に憧れる人には共感できない。悩みつつも余裕を選ぶ、そういう人を希っている。

和紙と墨で長く残る（帳海苔）

結婚式、葬式、上棟式などのときの買いやいただきものの記録が残っています。

廃屋の大槻様や農家のツムイ様の記録は、貴重な資料でしょうか。大きな書は遠忌記念で仏教の経、無別道益が書かれたもの。

物置に眠る（焼き印入り道具）

物置には祖父や曾祖父を示す山半の焼き印入りの道具が溜れていました。特に多かったのが餅用の干し板。多くの人に振る舞う機会があったのでしょうか。

学校のグラウンドは（ため池）だった

ほとんどが農家だった昔は、ため池が多く、ましてや学校のグラウンドにかわりました。

学校から子どもたちの賑やかな声が聞こえてくるが、一博さんは嫌だとは思いません。

・あとがき・

お話を伺って

東海道沿道にある家屋というのがきっかけで、今回の協力をお願いしたのであるが、開口一番「20年遅い」という厳しいお言葉を頂戴した。そこから始まった調査であるが、その実はわたしたちの取組みに共感したうえでの叱咤激励だったように感じている。飾り気のない、何も隠さない、そんな自然体で受けいれてくださったご当主に、感謝申し上げます。

これからの「目川（めがわ）」に思うこと

江戸の五街道のひとつ「東海道」。その歴史に想いを馳せ、様々な情景が目に浮かぶようである。しかし、今の東海道は通過交通に生活を脅かされ、横断すらままならない状況にある。そんな中でも、地元住民が中心となり「東海道ほっこりまつり」が開催されているとおり、今も変わらず地域資源であり続けているのだろう。こうした価値意識を、次代へとつないでいきたいものである。

NPO法人 くらすむ滋賀

わたしたちは、美しい家屋を住み継ぐための仕組みとして、語りを紡ぐことにより地域文化や地域社会を再発見、再評価する「住まいの記憶史」を紡いでいきます。こうした活動を通じて、百年先の次代へと守るべき地域文化や地域社会をつないでいくことに貢献します。

りっとう空き家バンク
RITTO AKIYA BANK

りっとう空き家バンクとは

栗東市では、空き家や空き店舗などを地域資源と考え、各地域のまちづくりへの想いに寄り添いながら、住み続けてきた住まいを活用したいなどの空き家の所有者の想いと、栗東市で暮らしたい、お店を開きたいなどの移住・利活用を希望する人の想いのマッチングをサポートします。

歴史を継いできた住まいを継承していくために、きめ細かな相談対応を行うとともに、空き家での多様な暮らし方や活用の方法などを提案し、栗東市での暮らしや利活用をお手伝いしていきます。

「りっとう空き家バンク」のお問い合わせは
TEL.077-551-0347
栗東市 住宅課（栗東市役所2階）
〒520-3088 栗東市安養寺一丁目13-33
https://ritto-akiyabank.jp/ りっとう空き家バンク

継いでいきたい
眺めがある。
そこには、
つちの香り
ひとの温度、
ものの記憶
まちの歴史…
しっかりと、
根付いている。

すみつぐ
sumi tsugu

MEGAWA
FEBRUARY 2020

©2020 City of Ritto All Rights Reserved.
ritto-akiyabank.jp